

魅力あふれる 私立小学校の世界

日本私立小学校連合会 会長
東京私立初等学校協会 会長
昭和女子大学附属昭和小学校 校長

小泉 清裕



小学校の英語教科化などを盛り込んだ新学習指導要領に注目が集まる中、先駆的な教育の成果で圧倒的な存在感を示しているのが私立小学校です。その尽きせぬ魅力について、日本私立小学校連合会会長、東京私立初等学校協会会長の小泉清裕先生にお伺いしました。(聞き手 大学通信代表取締役社長・田所浩志)

——いよいよ2020年度にクローズアップされている大学入試改革ですが、それに付随して学習指導要領が変わって来ます。特に英語教育。もともと私立学校は実験的な部分からスタートしてさまざまなチャレンジを重ねてきたと思いますが、小学校教育は今後グローバル化に向けて、どのような展開を考えていらっしゃいますか。

小泉 古くは白百合学園小学校が1881年の創立以来、フランス語による外国語教育を始めています。1888年創立の暁星小学校も同様です。フランスの修道会が設立に大きく関わったので、フランス語で神様を讃えることが目的だったわけです。1867年が大政奉還ですから、10数年で外国語教育を始めていたということが素晴らしいですね。

公立学校も文部省(=当時)の指定により、1992年に大阪の味原小学校と真田山小学校の2校が英語教育を推進するための研究開発を始めました。だから25年前のこの年が公立小学校外国語元年です。ただ公立学校の場合は、どうしても校長や教員の転勤が

くわけですね。

小泉 本学では小学校教育を「肉じゃが」に例えて話をします。それは何かというと、肉じゃがは一つひとつの素材が崩れていないですよ。ジャガイモはジャガイモ、肉は肉、タマネギはタマネギで、一つの器の中でお互いに味を出し合って、いい味を出す。ジャガイモが国語、タマネギが算数だとすると、体育が醤油、音楽が砂糖…と考えていって、あとは何を足せば美味しくなるでしょうか。みりんですね。

ですから、英語はみりんになる必要がある。みりんだけを味わわせるのではなくて、ほかの具材を活かす素材になるというのが外国語教育だと思うのです。小学校は英語塾ではないから、最後に入ったものが主役になってはいけません。

——ただ、そのみりんはすべての具材に浸透していくという…。

小泉 そう、すべてに浸透していく。理科にでも音楽にでも、どこにでも入っていく。ですから小学校における外国語教育は、中高や大学の語学教育とは違います。全体の器の中で英語を活かす方法、「英語があれば他のものが生きる」方法というものを考えていく必要があります。

ある色を見せて、「これは何色ですか」って聞くのは変じゃないですか。でも、例えば「春」って何色ですか。What color is spring for you? そうすると、日本人は「ピンク」と答える人が一番多いそうです。でも、外国人はそうは答えない。グリーンだとかイエローと答えるそうです。日本人の心の中にあるのは桜のイメージ。そうすると、次はWhat color is peace for you? 平和って何色ですか? そういうこ

とを考える教育が、小学校の英語では必要なかもしれません。

——それは英語を通じた日本文化、あるいは異文化理解にもつながりますね。

ところで、東京私立初等学校協会では毎年、各教科の先生方が学校の枠を横断して研修を行っています。それは、私学全体の底上げになっているのではないのでしょうか。

小泉 私立学校は創立者が自分の思いを叶えるために創った経緯がありますから、これまで、互いに協力して何かをする必然性はありませんでした。ところが昭和16年、太平洋戦争の勃発直前に国民学校令が出て、すべての小学校は廃校とし国民学校とするということになった。そのときに初めて、共通の問題が起こったのです。みんなで力を合わせて、私たちの学校を残す方法を考えよう、と。それが東京私立初等学校協会のスタートなのです。

そうした状況で、初めて学校同士が力を合わせるという目的ができた。それぞれの学校が願っているもの、目指しているものは違っても、「子どもを育てる」という点では共通しています。ですから、英語教育にしてもほかの教科にしても、各学校がそれぞれの思いで取り組んでいることをみんなで検証し、その教育方法の優れた点はどこにあるのか、どこをもう少し改善すればいいのか、お互いに意見を出し合う。これが研修会の一歩の目的です。

そして、その成果は、できれば公立学校の先生とも共有したい。私立小学校の子どもたち7万人だけが目の前にいる子どもではなくて、全国には650万人の小学生がいるわけです。その子どもたちとも、素晴らしい教育を分かち合いたい。そのために、

全国の先生方に、私たちの持っているノウハウを積極的に提示していく。そうした取り組みが必要ではないかと思っています。——先駆的な教育の積み重ねが全国の子もたちに広がれば、国力の向上にもつながる。私学の一つの使命と言えますね。

一方で、私立学校には、付属校を持たず程よいスケールでしっかりした教育を行っている学校もあれば、ワンキャンパスで異年齢のお兄さんお姉さんと関わりが持てる学校もある。そうした私学の多様性についてお教えてください。

小泉 本学でいうと、子ども園にゼロ歳児もいれば、大学院の講座には、50歳代の大学の先生が、小学校における英語教育の現場の理論を知りたいということで、学びに来られたこともあります。そういう意味

で、ここではきわめて幅広い年齢の人たちが学び合っている。これは教育の場としても、研究の現場としても極めて貴重だと思います。

全国に230校、東京には54校の私立小学校がありますが、学校のスケールもみんなバラバラだということがいい。いろんなものがそこにあるから、逆に言えば保護者の方々が求めているものがどこかに必ずあるんだと思います。

繰り返しますと、私立が今まで培ってきたものが、世の中で求められています。それを言葉で言うなら、ダイバーシティ(多様性)ということになります。求められているものが大きく変化してきている。これからの教育は、そうした多様性に応えられるようにならなければならないと思いますね。



educationの「e」は、interior(内部の、内装)に対するexterior(外部の、外観)、つまり「外」という意味なんです。そして、「ducation」はラテン語のducere、「引っ張る」に由来します。すなわち、エデュケーションとは、中にあるものを「外へ引き出す」という意味なんです。

一方で、instructionとは、中に(イン)組み立てる(ストラクション)。日本の教育には教の「教える」と育の「育てる」があって、教える側に主体が行くと、インストラクション、つまり教え込み型になってしまう。

子どもって、どうすれば歩けるようになるでしょうか。時間が来れば、放っておいても歩くようになる。それを、歩かせてあげる場所に連れて行けば、子どもは立ち上がって歩くというのが「エデュケーション型」。要するに、子どもが持っている能力を引っ張り出してあげる。それが、澤柳先生も小原先生もみな目指したことなんです。

日本では、教え込む方が楽なんです。一定の高さまでみんな到達しますから。でも、このときに初めて「勉強」という言葉が、日本語で「学習」という意味に使われた。

江戸時代にはこんな言葉は使われていませんでした。勉強というのは、おまけします、「お客さん、勉強しますから買ってや」という意味でつかわれる言葉だった。それが、明治になってから、みんなで苦労して、むち打たれて、やれーって言われることが勉強という意味になってしまったんです。——「勉強しろ」というのは、嫌な言葉ですよ。

小泉 私はこの学校から、勉強という言葉を追放して、学び、学習という言葉に変えました。ムチで打ってやらせるのではなくて、楽しいねと思うものを引き出す形を取りたい。その方法に関しては、それぞれの学校でそれぞれの持ち味がある。でも最終的には、「学ぶことが面白い」と思わない

子どもの個性を引き出す「創造的な教育」が魅力

——私立学校はスピードが速く、国際化や情報化など、カリキュラムなども常に時代の変化を先取りしている感があります。

小泉 私立学校はいつから始まったか。私たちはどうしても明治5年の学制公布を思い浮かべますが、調べてみると、すべてが私立だった時代がある。江戸時代の手習い所とか寺子屋と呼ばれていたものです。これらは全部個人営業。どこからも補助を受けていない。ですから、当時の記録を見ると「大根2本」などと書いてある。「先生、大根2本で教えてください」「ああ、それでいいよ」と。しかも、その当時教えてくれた先生というのは「師匠」であって、一生の繋がりになっていたというのが、江戸時代の文献に出ているんですね。

その上、何がすごいかというと、皆で大きな声で「子曰く(のたまわく)」と講読する授業もあるけれど、その子の家が魚屋なら、商売をベースにした書き物を使って文字を教える。農家の子どもには、いつ種を蒔くかという本を読ませる。そんな多様性のある教育を行っていた。教室も、みんなが前を向いている今の学校のスタイルではなくて、机が動かせる。それで、子どもたちがみんな壁の方を向いて学習している絵があるんです。全部が個別指導。江戸時代の日本の教育は世界に誇れたんですね。

トロイアの遺跡を発掘した考古学者ハインリヒ・シュリーマンが1865年に中国船に乗って、日本を訪れています。八王子あたりの絹織物を視察したり、銭湯に行ってお風呂に入ったらしい。それで、こう驚いているんです。「日本という国は漢字

とひらがなとカタカナ、3つの文字を使う不思議な国だけれども、すべての人が文字を読み書きできる」と。当時、ヨーロッパでもっとも識字率の高かったロンドンで30%程度だった時代に、日本は地域差があったとはいえ、江戸時代末期には3000万の人口に最大で1万5000の寺子屋があり、80%~85%くらいの識字率があったそうです。これはすごいですよね。

——空海が829年に創設した綜芸種智院なども、私学の起源みたいなものですよ。大学でも、駒澤大学や龍谷大学のように、淵源をたどれば400年近い歴史を誇る私立学校がある。

小泉 日本にも、そういう世界に誇れる教育があった。それをもう一度取り戻す必要があるかもしれません。近代化を推し進めるために、明治5年に画一的な教育が始まりましたが、一方で、上からの押し付けではなく「学び舎」、学んでいる人たちを中心とした教育をやりたいというのが、大正デモクラシー時代の「八大教育」であり、「新教育運動」だったんだと思います。そこから、既に130年が経っている。成蹊の中村春二先生ですとか成城の澤柳政太郎先生、玉川の小原國芳先生ら優れた先駆者がいて、新しい教育運動を起こしたわけです。

——当時は今風にいうブッシュ型じゃなくて、プル型、引き出す。子どもたちの個性であったり強みを引き出すことが、その大正時代の教育の目指すところでした。

小泉 そうです。例えば、educationという言葉とinstructionという言葉は、どちらも「教育」と訳されていますね。この



私立学校には建学の精神、理念があって、創立者の思いが独自の教育方針として先生方に継承されてい

と、自分が一人になったときにやらなくなる。だってね、一生学びなんですよ。

——今の子どもたちが大人になる頃、AIだとかロボティクスの進化により、職業も今まであったものがなくなるなどと指摘されています。そんな時代の中で不易と流行、変わらないもの、これから変えていかねばならないものとは何でしょうか。

小泉 それぞれの「心の部分」というもの、人の感覚とか感情とかは、自分でも計りき

れないものがあります。そういう、自分を制する力だとか、自分の感情を相手に伝える力は、700万年の人類の歴史の中でも変わっていないかもしれない。それは、私が触ったものとAIが触ったものとが、何か電極で繋がって…という問題とは違う次元のものではないかと思えます。そうすると、AIでは満たされないもの。自分をコントロールできるような力がこれからは求められてくるのかもしれない。

私立小学校は「ホーム」という一生の宝になる

——そうすると、これからの学校には、親子、先生方との距離の近さ、友達同士の付き合い、そうした人間関係に関して、どのような環境を与えることができるのかが問題になってくるかもしれませんね。

小泉 そう思います。かつてPTAはP（ペアレンツ）とT（ティーチャー）のアソシエーション、すなわち親と教師だけでよかった。子どもたちにとっても、家のホームと学校のホームがあればそれでよかったんですけれど、今はそれ以外にもまだ必要な場所がある。グラウンドを見てください。学校の終わった子どもたちが遊んでいる。あるいはアフタースクールで過ごす子どもたち。あの子たちにとっては、学校にいる時間の方が絶対に長いですよ。

昔のような、社会が子どもたちを育てる仕組みが失われた今、そうした子どもたちのための場所を用意してあげなければならぬ。家にいるときのAちゃんと、学校で授業を受けているAちゃん、アフタースクールにいるAちゃんは違った子であったりする。でも、この3つを合わせてAちゃんなんだということを捉えられるアソシエーションがあったら、子どもも救われるのではないのでしょうか。

——子どもに携帯を持たせたり、ハード面のセキュリティを確保するといった、安心安全への対応も要請されます。

小泉 安全という点では、本学は2カ所からしか入構できず、常駐している守衛さんが24時間態勢で監視しています。

それから、正門には電波が通っていて、子どもたちが持っているチップに反応する。それで、子どもが何時に登下校したか、親が分かるシステムを導入しています。

——東日本大震災では、交通機関がマヒするなど東京でも大きな被害が発生しました。

小泉 地震では通学途中が一番怖い。そのため、東京と神奈川の私学では中高と小学校が連携して、「避難校ネットワーク」というものを整備しています。

例えば、子どもが自宅から学校に行くまでにA校、B校、C校があるとします。これは小学校でも中学、高校でもよいのですが、登校途中で大きな災害があって、電車を下ろされたとします。すると、最寄りのB校に行って、「すみません、私は〇〇小学校の子どもですが、助けてください」とお願いすると、「はい、わかりました」といって受け入れてくれる。そして、自分の小学校にメールで連絡が届くシステムが整備されているのです。ですから、自宅から自分の小学校までの途中でどんな学校がどこにあるかだけは、保護者の方に調べていただくようお願いしています。

——それは素晴らしいシステムですね。

小泉 その絶対条件として言えるのは、子どもたちに力を付けておくこと。3.11の時も、交通機関がマヒして渋谷駅で何十人もの児童が取り残されそうになった。そうしたら、5年生の子が「大変な地震で電車が動かさそうだから、一番近い学校に帰ろう」と、低学年の子を連れて学校まで戻ってきた。

——それはすごいですね。生きる力。

小泉 低学年と高学年の子どもたちが、お互いに顔と名前を知っている。何よりも、同じ制服を着ているので、名前は分からなくても、「おいで」と言えば何とかなる。それで、1時間近くかかったけれども、とにかく歩いて帰ってきてくれた。学校が文字通りホームになったわけで、これは本当にうれしかったですね。

——それは素晴らしいことですね。それでは最後に、これから私立小学校を目指す保護者の方々にメッセージをお願いします。

小泉 私立学校にはそれぞれが違う専門性があります。誰でも、おそばを食べたいときにはおそば屋さんに行きますし、パスタを食べたいときはとんかつ屋さんではなくて、パスタ屋さんに行きますよね。つまり、私立学校にはそれぞれ特徴のある一品があるんです。「これがうちの出すメニューですよ」と。そこを取り間違えないことです。

そのためには、学校選びを一所懸命にいただきたい。小学校受験は、子どもたちをどんなふう育てていけばいいかということ、保護者が真剣に考える最初の機会です。私立学校は決して遠い存在ではなく、そこに「何かがある」かもしれないということ。そのためにも、一度私立学校を見ていただきたい。親が自分の子どもをどう育てるか、どんな大人に成長してほしいかという夢を語る絶好の機会だと思っています。

——まさにその通りですね。それに、私学では親子3代が同窓生というように、代々愛され続ける「何か」がある。

小泉 先ほどのお話にもありましたが、転勤がありませんから、教師が定年までいる。そうすると、いつ母校に遊びに行っても、「先生、変わらないね」「あんた相当変わって、誰？」みたいに笑い合って（笑）。子どもたちがどれだけ成長して、外見が変わっても、お互い話し始めると、すぐあの頃に戻ることができる。私立学校だと、卒業した後も「ホーム」になる。これは本当に一生の財産として支えになります。

——まさにそれこそが、私学の大きな魅力であると言えますね。

小泉 私学は、10年や20年のスパンで揺れるのではなく、何十年もの時代を積み重ねていく中で、根幹となる揺るぎない教育を培っているということが一番大きい。もちろん、時代によって変化していく部分はありますが、不易と流行という「不易」の部分が根幹にあるというのは、非常に大きなことであると思えますね。

——本日はどうもありがとうございました。

